はくぶつかん　プラネタリウム　古民家園

あるむぜお

府中市郷土の森だより　№26　al museo

武蔵野の風景11 鍔山英次写真より **雑木林**

かって広大な武蔵野台地をおおいつくしていた雑木林。国木田独歩の『武蔵野』を引きあいに出すまでもなく、武蔵野と雑木林のイメージは結びついたものとなっています。

近世には大規模な新田開発が続き、近代以降今日に至る大開発は、ほとんどの雑木林を住宅地や工場に変えてしまいました。しかし、いつの時代にも雑木林は人々の生活のごく身近な存在であったことも確かです。

コナラ、クヌギ、エゴノキなどからなる林では、計画的に切り倒されては薪や炭の材料とされ、落ち葉は田や畑の貴重な肥料となりました。エゴノキの枝を用いたクルリ棒（麦などの脱穀具）が武蔵野の特徴的な農具であることは、最近明らかにされたことです。

葉がすっかり落ちた雑木林。木枯しを頬に受けながら見上げる澄んだ空は、いつもより何倍も大きく見えませんか。枯れ葉の上を歩く時のカサコソという心地よい響きが、霜柱を踏む音に変わる頃、樹々は冬芽を出してせいいっぱい春を待っています。写真は、府中崖線を西にたどった城山（国立市）付近。　（O）

企画展

郷土玩具 天神人形の世界

—加藤文成コレクション—

展示会案内

平成６年２月11日㈷～３月６日㈰

３月の桃の節句に雛人形を飾る風習が、公家・武家や富裕な商人たちから、一般庶民にまで広まっていったのは江戸時代の中頃でした。

京や江戸の人形師が作る豪華な衣裳人形（上手物）に対して、身近な素材で作った庶民の人形は下手物と呼ばれました。初めは内裏雛だけでしたが、すぐにいろいろな種類の人形が創作されるようになりました。

人形の素材は、瓦の産地では粘土を焼いた土人形、家具や下駄の産地では大鋸屑を利用した練り物人形、また、紙を幾重にも重ねて糊で固めた張り子人形などがあります。これらを総称して郷土人形と呼んでいます。

人形のモデルで一番多いのは菅原道真で、次に目立つのは歌舞伎役者です。ちなみに動物で多いのは、馬ついで牛のようです。

菅原道真がモデルにされた理由に次のことが考えられます。

①道真は無実の罪で太宰府に流され、死後雷神となって京の町に災害をもたらしたという伝説が広まり、道真の怨霊を鎮める夏祭りが各地で行われるようになったこと。

②雷神（天の神）を祀る古くからの天神信仰に、道真が加わり、天神社・天満宮が全国に広まったこと。

③道真が梅を愛したことから、室町時代の禅僧たちにより、文人のシンボルであった梅の花と道真の結びつきが強調されたこと。これによって貴族や武士、商人たちの学問を志す人々からも道真は支持されたこと。

④寺子屋の普及と同時に、道真は学問の神、書道の神として祀られ、子どもたちからも親からも尊敬されるようになったこと。

以上のことから、天神さまの社の数と同様に、天神人形の生産地の広がりや人形の種類の豊富さが理解できるでしょう。

今回の郷土の森梅まつりにちなんだ展示会では、調布市深大寺東町にお住いだった加藤文成氏が戦前戦後を通じ60年以上にわたって収集された日本の郷土玩具１万数千点（現在、調布市郷土博物館所蔵）の中から、天神人形と関連資料をご紹介します。（１）

岡山県の久米天神人形（加藤コレクションより）

■梅講座①

「菅原道真の怨霊信仰から天神信仰へ
—天神人形の生産地の背景—」

日時　２月13日㈰ 午後２時～４時
講師　真壁俊信氏（神道大系編纂会）

■梅講座②

「郷土玩具の中の天神さま」

日時　２月27日㈰ 午後２時～４時
講師　畑野栄三氏（郷土玩具研究家）

次　回　予　告

発掘最前線
—眠りから覚めた時代の証言者たち—
問い合わせ　府中市教育委員会埋蔵文化財担当
１月22日㈯～１月30日㈰

身近な　歴史入門講座　その1

「あるむぜお」の入門講座も種々の分野を取り上げてきましたが、今回からしばらく歴史に関して触れてみようと思います。とは申しますが、歴史と言うだけでは間口が広すぎて扱いかねますので〝身近な〟という言葉を付しました。

最近は時折、仕事を退職なさった位の年配の方が、少し暇ができたので自分の家のことや生まれた所、住んでいる所などの事を調べてみたいんだが…とおっしゃって来館されることがあります。この稿ではそういう方々の要望に博物館としてどんなお手伝いができるのか、またどんな利用をしていただけるのかに的をしぼり、府中の事を例にとりながらお話してみようと思います。時代的な範囲は、地域の情報が比較的多く残っており、調べ方によっては個人の情報を得ることも可能な江戸時代以降とします。

まず、手っとり早いところ―自分―から出発してみましょう。ここ10年位の間に〝自分史〟という言葉が随分市民権を得るようになりました。これは、庶民が自分の言葉で自分の事を飾らずに記そう、という運動から発した言葉です。

この際でも全く文学的な面からのみ記すのでなければ、たいていは〝いつ〟自分はどうしたのか、という時代との関わりが表される筈です。その場合おそらく〝記憶〟か、日記やメモなどの〝記録〟を基に記述することになるでしょう。

ただ、記憶力抜群の人でも年月日の確認が必要でしょうし、記録があっても外の事柄との関係を知りたいということになります。その際に有効なのは、扱う事項を年代順に整理してみることです。つまり個別の年表を作り、それより広い範囲のものと照らしてみる事で、これから扱おうとする事柄の縦軸と横軸とでの位置が見えてきます。縦横の広がりを視野に入れる事で年代記的自分史が社会史の中の自分史になっていきます。府中の例で言えば「武蔵府中叢書12」として『府中市歴史年表』が刊行されていますので参考になる筈です。さらに横軸の方についても、『府中市史』やその他の概説書によって多少の基礎知識は仕入れておくと個別の事柄が理解しやすくなります。

また、先の記録類のことを、歴史を解明する際に根拠となる〝史料〟と言いますが、自分の記憶で追跡できないところでは史料が有ると無いとでは事柄を知るのに大きな差が生じます。現代の文書でも次の時代には史料となり得るわけですから、将来に今という時代の姿を残そうと思えばそういうものを散逸させない必要があります。しかし史料の残り具合はそう思い通りにいくものではなく、偶然に左右される部分も多分にあります。史料となりうる資料を保存していくことは博物館の大きな機能の一つです。

自分の経験より以前のことを調べてみようとする時には、まずどのような史料が有るのかを確認するのが第一となります。しかし、身近な事はその時には分かり切っていることであるために敢えて記録を残そうなどとしないのが普通かも知れません。いざ自分の家のことなどを記してみよう、という場合に案外分からないことが多いのはそのためもある様です。親の代、祖父の代の事でも〝そう聞いてはいるが確たる証拠は無い〟という例が結構多いのではないでしょうか。さしあたり他に史料が無いとすればこの〝聞いている〟事を手がかりにする他はありません。次回はこの手がかりを基にできることを考えてみます。　（B－ha）

まずは、参考資料室で

野鳥の住む森

中村　武史

地球上の生物は、大地・水・空気、そして太陽の恵みから植物が作り出すエネルギーにそのすべてが依存しています。特に植物がその種類・数量共に集合する森林は、エネルギー生産量が高く、加えて大気組成(そせい)や水循環(じゅんかん)・気候を左右する力を持ち、地球生態系に大きな影響を及ぼします。森林は、生命が存続するためには絶対に欠かせない地球の一環境であるわけです。

近年、陸地の34%を占めていた森林面積が30%にまで減少し、特に熱帯林破壊等の問題が重要視されるなど、努めて森林を守ろうとする話題が目立ちます。しかし、ここでお話しする森林については、森林伐採(ばっさい)に関わる討論ではありません。人類を頂点としたあらゆる生物にとって、現在、そして今後に必要な森林とは何かを考える導入のようなものです。いわば森林に関する身近な知識として、良い森が持つ要素のひとつをご紹介するわけです。

＝郷土の森で見られる野鳥＝

郷土の森園内を散策中の出来事です。突然目の前を群れをなして飛び立ったムクドリに一瞬驚きながらも、ふと気が付いたのは、ずいぶん野鳥の数が増えたのではないかという事でした。

郷土の森は開設して、丸6年以上を経過しています。オープン当初の園内は、ケヤキを筆頭にクヌギ・コナラ・シラカシなど、それぞれの植栽樹も根つきが悪く、葉もあまり生い茂ってはいませんでした。しかし、6年の歳月は緑を成長・安定させ、なるほど人工的とはいえ、だいぶ「森」らしくなってきたのです。野鳥は良質の森であればあるほど、生活圏を求めて多数集まって来ます。そこで注意して、認められる野鳥種を気がつく限り書きとめておくことにしました。調査という形ではなく、機会のある度に見つかれば記録するといった方法なので、多分に見落としている種類もあろうかと思いますが、それでも右の表のような野鳥を確認することができました。

年間を通して、7目19科31種を数えましたが、都市化の現状を考えれば、非常に豊富な種類といえるでしょう。園内西側に造成されている池の周辺や芝生の上、そして雑木林・疎林広場など、まんべんなく野鳥を確認することができました。季節の変化に応じても、ツバメやジョウビタキといった渡り鳥も姿を見せてくれました。また、興味深いことにキツツキ類であるコゲラ

目	科	種	水辺	草地	樹林	季節
ガンカモ	ガンカモ	カルガモ	○			周年
キジ	キジ	コジュケイ		○	○	〃
		キジ		○	○	〃
ハト	ハト	キジバト			○	〃
アマツバメ	アマツバメ	ヒメアマツバメ		上空		春秋
		アマツバメ		上空		〃
ブッポウ	カワセミ	カワセミ	○			周年
キツツキ	キツツキ	コゲラ			○	?
スズメ	ヒバリ	ヒバリ		○		周年
	ツバメ	ショウドウツバメ		上空		春秋
		ツバメ	○	○		春～秋
		コシアカツバメ		上空		春秋
		イワツバメ	○	○		春～秋
	セキレイ	ハクセキレイ	○	○		周年
		セグロセキレイ	○			〃
	ヒヨドリ	ヒヨドリ			○	〃
	モズ	モズ			○	〃
	ヒタキ	ジョウビタキ		○	○	春～秋
		ツグミ		○	○	〃
		ウグイス			○	〃
	シジュウカラ	シジュウカラ			○	周年
	メジロ	メジロ			○	秋～春
	ホオジロ	ホオジロ		○		周年
		カシラダカ		○	○	秋～春
		アオジ		○	○	〃
	アトリ	カワラヒワ		○	○	周年
	ハタオリドリ	スズメ		○	○	〃
	ムクドリ	ムクドリ		○	○	〃
	カラス	オナガ			○	〃
		ハシボソガラス		○	○	〃
		ハシブトガラス		○	○	〃

や、カワセミのようにかなり自然度の高い所に見られる種類も目撃しています。ただし、郷土の森は市街地より離れた場所に位置し、加えて多摩川に接しているという条件を考慮に入れれば、かなり自然環境には恵まれた中に置かれていると考えられます。ゆえに野鳥は、必ずしも郷土の「森」だけに魅せられて飛来するわけではないものと思われます。比較対象のデータこそありませんが、それでも6年前よりは確実に野鳥が来やすい「森」になってきているのです。

＝森の大原則＝

野鳥が来る森・住める森。すなわちこれが、良質の森かどうかを判断する時の重要な目安になってきます。

地球上にエネルギーを供給する最大の要素は太陽です。緑色植物の葉に含まれる葉緑素(ようりょくそ)は、森に降り注ぐ太陽エネルギーの内、約半分を吸収します。植物はこの葉緑素によって、空気中や地表面から吸収した無機物を使い、炭水化物・脂肪・たん白質といった有機物を合成します。太陽エネルギーは、この時の重合(じゅうごう)エネルギーとして閉じこめられます。ただし閉じこめられるエネルギー量は、吸収した太陽エネルギーの10%にすぎず、残りは逃げてしまいます。また、これらの葉を食べて生活エネルギーを得ている青虫などは、さらに植物がつくったものの10%を使い、その青虫を食べる野鳥も全体の10%以下を食べるにすぎません。ゆえに野鳥はさまざまなものを餌(えさ)として捕食し、一点に集中しないようにします。当然タカやフクロウのように大型の鳥類も、小型の鳥類を捕食する際には、その10%以下のエネルギーしか使えません。それ以上食べることは、それぞれの種の存続を危うくすることにつながるのです。ですから、森林の青虫の分量は、森林の葉の量よりだいぶ少なく、野鳥の全量も虫の全量よりもずっと少ないのです。これが森林生態系のつり合い、森を維持するための大原則ということになります。いい換えれば、野鳥が多種多数集まる森林こそ、その10倍の虫、100倍の葉を有する証しであり、餌が豊富で非常に安定した、生産性の高い森と考えることができるのです。

＝野鳥から見た森＝

野鳥が、生活場所を森林に依存することの意味を考えてみましょう。まずは先述のとおり、果実・花・昆虫・ミミズ・カエルなどの餌が豊富なことです。森林を構成する樹木が子孫を残し、分布を広げるための手段として種子を散布する際に、その森林に生息する動物の餌となる果実をつけます。これを食べた動物が種子をいたるところに運搬するという仕組になっています。森の植物にとっても、食べられること自体は決して被害ではなく、むしろ望むところなのです。

熱帯雨林では、多様な生物が存在し、果実を食べにくる動物は、サルやゾウなど大型のものまでいろいろですが、日本など温帯の広葉樹林では、主に野鳥が植物のパートナーになっています。森林の樹木がつける果実は、液果という柔い多肉質で、野鳥の好むタイプであることからも、種類も数も多く高次消費者である鳥類に子孫継承を託していることがうかがえます。

その他の要素として、階層の多い森林は、外敵から身を守るための隠れ場所・子を育て守るための営巣(えいそう)場所として最適であり、かつ行動する際に見晴らしのきく枝が豊富なこともあげられます。採餌(さいじ)行動ひとつとっても、森林性鳥類の多くはカラ類空間とヒタキ類空間に分かれ、葉・枝・幹の上を歩き、餌を拾い上げるパターンと、空中の餌に飛びかかるパターンに大別されます（中村登流(のぼる)「適応空間」概念）。従って、野鳥が集まる森林には、広さと階層の多さに加え、空間も必要な要素となっているのです。

樹木の密集度からは、決して森林と呼べない郷土の森にも、比較的多くの野鳥種が確認され、上記の採餌行動の両タイプともに存在することもわかりました。これはある程度の階層・空間、そして餌を有することの証明であり、ゆえに純粋な森林でなくとも、良い森の条件を備えた環境は作り得るということです。難しいのは、その環境をいかに持続させていくのかということでしょう。

＝最近の発掘調査から＝

京王線府中駅南口で続けられていました第２地区再開発事業にともなう一挙に１万㎡を越える発掘調査も終了し、国庁推定地である京所（きょうず）地区（大国魂神社東側一帯）の北側で、武蔵国府の全貌を知る上での、重要な手がかりが明らかとなりました。そこで今回は、この調査について簡単に述べてみたいと思います。

まずはじめに、この調査地区では北側に比べ南側が、古代の竪穴住居跡が極端に少ない状況でした。しかし、この付近の地形を見た場合、水の便からみてハケに近い南側が、住み易いと考えられます。しかし、現実には水の便が悪いハケから奥まった北側に、竪穴住居跡が多く分布しているわけで、ここには南側に竪穴住居を造らせないようにする力が、働いていたことが考えられます。状況から見てこの力とは、国庁である可能性が有力です。現段階において厳密な位置が明らかでない武蔵国庁について、北側に広がる竪穴住居跡群を見ていますと、その南側に竪穴住居跡が希薄な部分が位置し、さらにその中心に国庁が存在すると言った、国府の同心円的な構造が想定でき、京所国庁推定地内に武蔵国庁が現実に存在している可能性が、この調査でますます強くなりました。

また、竪穴住居跡の１軒からは、当時の役人の必携の品である硯（すずり）が出土しました。硯は現在のかたちのものではなく、円面硯（えんめんけん）と呼ばれるもので、裏面には朱墨で「多研」と記されていました(写真)。これについてはいろいろと考えられますが、「多」は多麻（たま）郡を表す用いられ方をする場合が多いようで、瓦や塼（せん）にも「多」と押印された例がみられます。一方、「研」は硯を意味するようで、多麻郡に関わる硯という解釈も可能かと考えられます。ただ、問題として武蔵国庁推定地の近接地に、多麻郡＝多麻郡衙（ぐんが）に関わるような遺物がはたして出土して良いものか、あるいは多麻郡衙も国府内に併設されていたのではないかという疑問も生まれ、一方では「多」をあくまで国府の所在郡として捉えるべきかなど、たった２文字の文字資料ではありますが多くの可能性が考えられています。

次に、けやき並木に隣接した北西隅近くでは、大型の掘立柱建物跡が並ぶような状況で検出されました。このうち１軒は、府中市内でも初めての四面に廂（ひさし）を持つもので、また１軒は３間×６間で床束（ゆかづか）も有する大型のものでした。これらの存在は、国庁に近いことから当調査地区内に、有力な人物が居住していた結果かと考えられます。

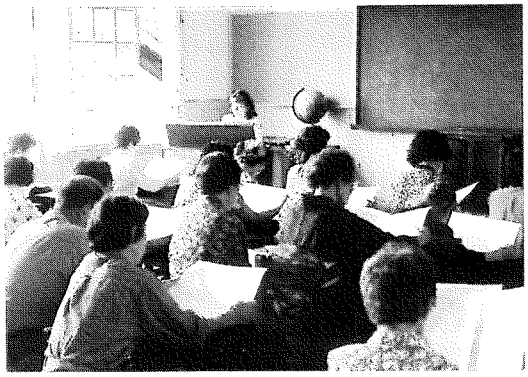
最後に、東側の将来府中駅から延びる道路となる部分で、古代の道路ではないかと考えられる、竪穴住居跡が途絶える南北の空白帯が見つかっています。この延長は府中駅北側でも見つかっており、ここでは道路状の踏み固められた状況を呈していました。このことから、期せずして今回の再開発が、なんと1200年前の道路？を復原する結果となりそうな状況にあります。

以上、府中市域でも最大面積の今回の調査では、ここで上げた以外にも、武蔵国府について多くの新たな知見が見いだされました。これらについても、今後追々お知らせできればと考えております。　（宮町１丁目

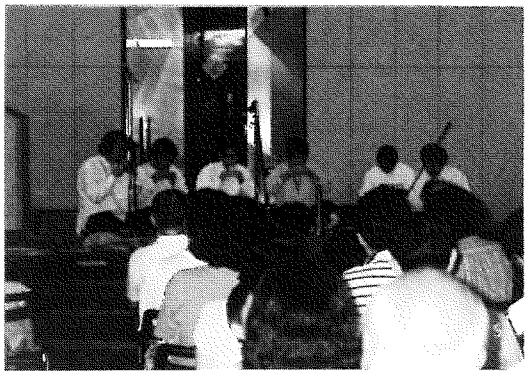
第２地区再開発事業地区の調査から　荒井）

カメラアングル

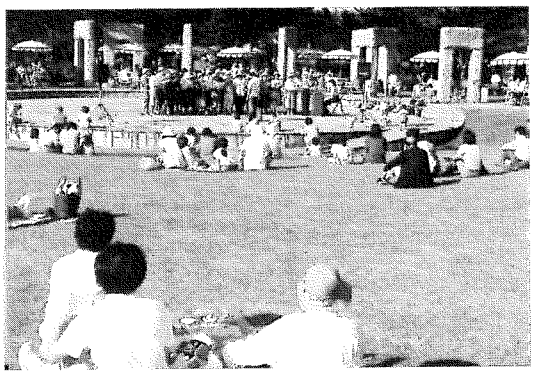
▶恒例の**武蔵国府太鼓**の演奏会は雨でエントランスホールにて（4月29日、響会）

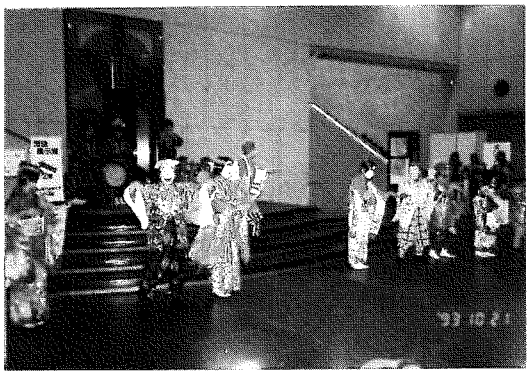


唱歌のつどい（協力、府中童謡の会）
▲昔の教室でオルガンに合わせて（9月25日）
▼芝生に寝そべって童謡を……　（9月26日）



▲縄文・弥生・インカ・マヤ……**古代の笛**の音色
（9月5日、上杉紅童&恋ケ窪土笛の会）





▶大国魂神社のお祭りに奉納される郷土芸能
（10月23日、**府中囃子**（はやし）保存会屋敷分（やしきぶん）囃連）

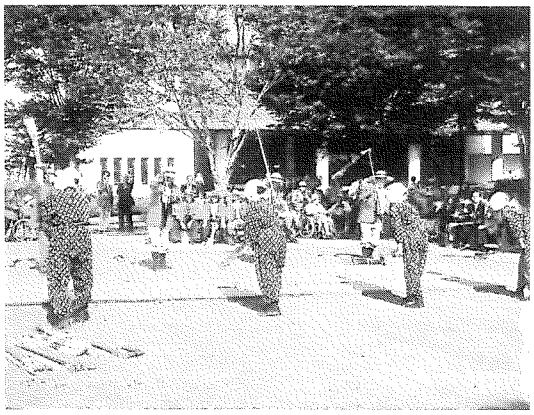
あれこれ　農具の周辺

―ボウチ唄―

クルリ棒で打ち叩き、麦の芒（のぎ）を落とす（脱穀する）作業をボウチと呼んでいます。ボウチは麦のほか、さまざまな穀物が対象となりますが、府中ではボウチというと、ムギブチを指すことが多いようです。

7月の真夏の盛り、両側に分かれ、向かい合ってボウチをします。ノゲ（芒）が舞い、体中がチクチクして、汗かきかきの作業でした。ボウチは日のあるうちに終えなければならず、このような辛い（つらい）仕事の中で歌われ、伝承されてきたのが、ボウチ唄です。

(1)大山さきに雲がでた　ホイホイ
　あの雲がでると雨か嵐か　ホイホイ



親和会（国分寺市）によるボウチ実演

(2)お前さんとなればどこまでも　ホイホイ
　親を捨てこの世が闇になるともホイホイ
(3)十七連れて瓜山（うりやま）へ　ホイホイ
　瓜の葉を寝ゴザに瓜を枕に　ホイホイ

これは府中で聞かれるボウチ唄です。ボウチ唄は、ホイホイという囃（はや）し言葉が入ることからホイホイ節といわれることもあり、また七五五七四という詞型も珍しいものです。

(1)の大山とは、雨乞（あまご）いや大山詣（もうで）で有名な神奈川県の大山のことで、大山のかわりに、昭島市や武蔵村山市では大岳山（御嶽（みたけ））に、奥多摩町では鷹（たか）の巣（す）山に、埼玉県入間郡では岩殿山と歌われます。そして(2)が関東一円で聞かれるのに対し、(3)は府中市、国立市、日野市、小金井市でしか報告されていません。この歌詞は、江戸時代、府中で栽培された御前栽瓜（ごぜんさいうり）（将軍家献上の真桑瓜（まくわうり））を題材にしているのかもしれません。

ボウチは戦後間もない、昭和22・23年頃にはやめてしまった所が多く、これは動力脱穀機の普及が大きな原因のひとつでした。そしてボウチ唄も、昭和に入る頃から次第に歌われなくなったといいます。

さて10月24日(日)・25日(月)に、第18回日本民具学会大会が府中で開催されました。左の写真は、郷土の森で実演されたボウチ風景です。本来は農家の二ワに麦をじかにあけ、クルリ棒で打つものですが、今回は畳の上で行いました。実際に体験する人もでて、大盛況でした。　（G）

インフォメーション

春を待つ郷土の森の催し物。

昔ながらの**和凧を作ろう**は1／15(祝)・16(日)。次回**森のコンサート**は1／16(日)で、稲川ゆかり作曲・演奏のピアノコンサート。多摩川の冬の野鳥を探る**自然観察会**は1／23(日)。**陶芸教室**、今回はワラ灰釉に挑戦、2／3(木)から毎週木曜日全6回。

冬の星座や月・星雲星団を探る夜の**星空観測会**は1／15(祝)と2／19(土)。**プラネタリウム**では夜空を飾る美しい光のカーテン・オーロラの神秘な姿を全天周映画で投影中。

詳しくはお問い合わせください。

こんなことをしている間に春はもうすぐ。春のさきがけは何といっても梅の花。郷土の森恒例の**梅まつり**は2／6(日)から3／13(日)まで。

あるむぜお　第26号

al museo　イタリア語
"博物館で" "博物館にて" の意

発行日　1993年12月20日
発行　府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921